

北海道高等教育研究所 ニュースレター

第17号

発行日 2021年3月31日

発行：北海道高等教育研究所

〒001-0013 札幌市北区北13条西3丁目2-1 アルファスクエア北13条409号 道私大教連気付
TEL011-311-1608 E-mail: hkifpu@yahoo.co.jp <http://jinken-net.org/heri/>

もくじ

- ・ 研究所ニュースレター第17号の発行にあたって
北海道高等教育研究所 事務局長 市川 治 1
- ・ 函館地域における学生食糧支援プロジェクト ～コロナ禍のもとでの学生支援の経験より～
講師 田中 邦明（北海道教育大学名誉教授） 2
- ・ フードバンクの取り組みについて ～コロナ禍の若者・学生は何を必要としているのか～
講師 館野 亜美（北海道大学教育学部研究生） 7
- ・ まとめについて
北海道高等教育研究所 代表理事 姉崎 洋一 8
- ・ 意見交換で注目したこと
北海道高等教育研究所 事務局 市川 治 9
 - ・ 阿部さまからのご意見・感想 10
 - ・ 原島さまからのご意見 10
 - ・ 米津理事からの感想 11
 - ・ 光本理事からの意見・感想 12
- ・ 第3回の北海道高等教育研究所のオンラインセミナーのご案内 12

研究所ニュースレター第17号の発行にあたって

北海道高等教育研究所 事務局長 市川 治

去る3月21日に1都3県に出されていましたが緊急事態宣言がリバウンドが危惧されるなか解除されましたが、新型コロナ感染症拡大が全国・道内でも下げ止まり・増加傾向のまま継続しています。

皆さまにおかれましては、年度末で教育・研究活動のとりまとめなどでお忙しいことと存じます。コロナ感染に気をつけながら、ご活躍ください。

さて、北海道高等教育研究所では、2020年度4号目のニュースレター第17号を発行することになりました。

この第17号では、2021年3月9日、第2回目のオンラインセミナーとして開催されました、「新型コロナと向き合う大学づくり」の一環としての「フードバンク・学生支援の取り組みについて」の報告・討論・感想について掲載します（なお、このセミナーへの参加者は18名でした）。

このセミナーでは、第1報告「函館地域における学生食糧支援プロジェクトの経験から」講師 田中 邦明氏（北海道教育大学名誉教授）と、第2報告「フードバンクの取り組みについて～コロナ禍の若者・学生は何を必要としているのか～」講師 館野 亜実氏（北海道大学教育学部研究生）のお二人から報告してもらい、その後、討論と意見交換を行いました。

お二人の報告は、今日のコロナ禍で困難を抱えた学生・若者に対するフードバンク・学生食糧支援の取り組みについて、函館地域や、札幌圏・道内における幅広い実践的な取り組み状況と今後の課題などが的確に報告されました。また、その後の討論・意見交換も活発に行われました。これらについての質疑や感想等も多く寄せられましたので、掲載させていただいています。

なお、このようなセミナーを引き続き開催する予定になっていますが、ご意見・ご要望等があれば、事務局にご連絡をお願いします。

2021年3月31日

事務局 市川 治

函館地域における学生食糧支援プロジェクト ～コロナ禍のもとでの学生支援の経験より～

講師 田中 邦明（北海道教育大学名誉教授）

はじめに

筆者は2000年3月に大学を定年退職した身分であるが、新型コロナ禍のもとで現在も非常勤講師として現職時代とほぼ変わらない授業科目をオンラインで担当している。国立大学でも運営費交付金削減で後任教員が採用できない厳しい財務状況が続いているようだ。講義の合間に学生と交わす雑談のなかで生活実態を聞き取ったところ、食費を削って生活する学生の苦境が見えてきた。ある男子の寮生は三食ともにカップ麺で凌いでいた。スーパーの安売りで異なるメーカーのカップ麺を箱買いし、飽きないようにローテーションしながら食べているようだ。このような食生活が若者たちの健康に悪影響を与えないはずはない。「食」は毎食ごとに外部環境と体内環境が直に接触する行為であり、栄養の偏りはもちろん塩分過多による高血圧やトランス脂肪酸による若年性成人病の発生も危惧される。そのようなわけで7月末に数個の段ボール箱いっぱい夏野菜を買い込んで、男子寮と女子寮に住む受講生に食糧支援を行ったところ好評であった。寮生に聞くと、友人たちにもお裾分けしてとても喜ばれたという。予想に違わず野菜や果物をほとんど口にしていない学生が多いようであった。このような個人的取り組みが、その後の学生への食糧支援活動を組織するきっかけとなった。

1. 地域企業団体との連携と善意のつながり

食糧支援の個人的活動には財源上の限界があるのは明らかで、10月上旬の後期授業開始時に大学の教職員組合と生協に支援を働きかけてみたが、教員も生協職員もコロナ感染防止対策に忙殺されていて具体的な動きは取れなかった。そこで北海道中小企業家同友会函館支部に食糧支援への協力を求めた。筆者は同友会と三十年以上のお付き合いがあり、勤務大学と同友会との包括連

携協定の締結にも関わった経緯があり、例年開講される「幹部大学」の講師を担当していた関係から、事務局に相談を持ちかけてみた。函館支部には579社の会員企業が所属し、その中には食品販売や製造を手がける企業が含まれていることから、食材を無償で提供してもらう可能性を探ってみることになった。さっそく学生の窮状を訴える筆者の一文を添えて、事務局からすべての会員企業にFAXを送ってもらったところ、大きな反響があった。翌日には数人の経営者から直接、筆者に電話で食材提供の申し出があった。八雲町の食品メーカーからは冷凍コロケ60キロを無償でいただくことになった。また、函館観光名所のトラピスチヌ修道院からは謹製のクッキーとホワイトチョコ150名分、救命のリレー普及会からマンゴー缶詰336個を頂戴した。また、地元のトラック運送会社には近隣の農協から寄贈されたジャガイモ1トン以上をトラックで運んでもらい、フードバンク道南協議会からは5キロ入りの備蓄用アルファ米130箱を譲渡していただき、江差町の福祉施設からは保存用パン2000個以上を筆者の自宅までトラックで運んでいただいた。

これらの支援によって基本食材として十分な量を確保することができた。さらに、同友会の加盟企業19社、そのほかに教育大学生協、今金農民組合などの団体と生産農家、個人を含めて合計50件あまりから、キャベツやニンジンなどの保存野菜、精米、インスタントラーメン、レトルトカレー、カップ麺、缶詰、お菓子、ボトル飲料などを寄付していただいた。頂戴した段ボール箱を開けると、まさに家庭に備蓄していたと思われる食糧品をかき集めてくださった様子がみて取れ、寄贈者の善意を深く感じることができた。集まった食材の総量は保管場所に困るほど膨大で、筆者の自宅の車庫と玄関フード内、同友会事務所の倉庫などに山積みとなった。車庫に入り切らない分のジャガイモ、アルファ米、保存用パンは教育大学と北大水産学部の学生寮に直接、筆者の自家用車に積みこんで配給し、寮務委員に公平な分配をお願いした。事後に寮生から筆者あてに届いたメッセージから、学生寮への直接配給はとりわけ経済的困窮度の高い学生に食材を漏れなく届けるうえで有効な支援策になったと思われた。

数件の遠方の食糧支援先には筆者が自家用車を走らせて直接受け取りに出向いた。豊浦町で有機農業に取り組む教育大学の卒業生からは有機野菜と手作り納豆の寄付があった。行く先々で寄贈者の思いを聞き取る会話を交わし、学生の窮状に共感する温かい言葉と善意に触れ、何度も涙が出るほど胸が熱くなった。とりわけ印象に残ったのは修道院長と電話で交わした会話であった。修道院のシスターらはコロナ禍に苦しむ国民をいかに支援すべきか、実にもどかしい思いで思案していたところに、同友会から学生の窮状を訴えるFAXが届き、学生への食糧支援を決断したと伺った。年末にはシスター手作りの真心のこもったお菓子類とともに、菜園で収穫した冬野菜と高額の寄付金まで届けていただき、まことに恐縮した。

2. 第1回食糧支援イベントの取り組み

最初の食糧支援イベントは寒冷期に入ってコロナ感染再拡大が続くなかでの実施であった。すでに全国の大学では青年団体や教職員組合などが学生への食糧支援イベントを実施していたことから、その方式を真似ながら「食材もってけ市」と称するイベントを実行委員会方式で取り組むことになった。まず、場所の決定と確保が問題となったが、初回は函館市内最大の学生定員をもつ北海道教育大学函館校で開催することとした。大学校舎内では厳重な感染防止対策が求められたため、雨風をしのげる大学前庭の東家で実施することとし、大学から借用許可を取り付けた。

ボランティアは大学近郊に住む筆者の友人や知人15名程のほか、筆者の講義の受講生5名から協力を得ることができた。これらの学生からSNSでイベント情報を拡散してもらったことも幸いであった。第1回「食材もってけ市」は11月22日（日）の11時から13時まで開催したが、1時間以上前から学生が集まってきたため30分繰り上げて食材配給を開始した。来場学生が続々と集まって開始後1時間程で食材が底をつき、備蓄場所から食材を何度か運んで補充しながら配給した。教育大学の学生以外にも北大生や留学生も含めて100名以上の学生が来場し、口々に感謝の気持ちを述べながら、袋いっぱい詰め込んだ食材を重そうに抱えて帰る姿に心がなごんだ。アンケートへの回答からも「このご恩は働くようになったら別の形で社会にお返しすることにしたい」との言葉が何人からも寄せられた。

初回の実施会場は屋外で暖房はなく、幸いに好天に恵まれたが、東家には食材が入り切らず、周辺の芝生にブルーシートを広げて食材を並べるなど、事前準備と後片付けにそれぞれ1時間ほどの時間と人手を要したが、ボランティアの人数が多くて幸いであった。後日の実行委員会では、事前予約の手続きがなかったため、来場者数が100名の予想をやや上回り、遅い来場者にはジャガイモとアルファ米しか提供できなかったなどの点が指摘され、公平な分配方法について検討することが課題となった。

3. 第2回食糧支援イベントの取り組み

第2回目のイベントは12月13日（日）14時から16時に実施し、屋外では降雪が予想されたため、屋内での安全なイベント会場を探索した。その結果、市内の私立大学が集中している湯川地区にある寺院の本堂を無償で借用することができた。本堂は吹き抜けのように天井が高く、畳敷の大広間は十分な広さがあり、三密状態を避けることができ、感染防止には適切な環境であった。また、玄関前には物品を大量に置ける車寄せがあり、さらにテントを張り出して床にブルーシートを敷き、大根、ジャガイモ、ニンジンなどの土付き野菜を屋外に並べることもできた。

当日の来場者は70名程度で、予想どおり日本人学生のほかにベトナム人の日本語学校留学生が多く来場した。また、自家用車で駆けつけた教育大学、未来大学の学生もおり、寮生以外にもコロナ禍で帰省もままならず、年末年始を乗り切るために食糧支援を必要とする学生が少なくない状況を聞き取れた。これを受け、年末に教育大学と北海道大学の学生寮に、筆者の自家用車で二度目となる保存用パンとジャガイモの配給を行った。

第2回イベントでは函館大学の学生が多くボランティアに参加し、米やジャガイモの袋詰めや運搬作業で大活躍してくれた。彼らにも来場学生同様、たくさんの食材を持ち帰ってもらったが、彼らの嬉しそうな表情と感謝の言葉にイベントに関わった成人ボランティアは大いに励まされた。

4. 第3回食糧支援イベントの取り組み

第3回目のイベントは1月28日（木）12時から13時半に、公立はこだて未来大学の駐車場で実施した。はこだて未来大学は函館市の郊外にあるため、交通の便がよくないため、過去2回のイベントでは来場できなかった学生が多かったものと思われた。大学事務局との交渉で大学玄関前の広い駐車スペースを借りる許可を取り付けた。1月に入ってから函館市内ではコロナ感染クラスターが次々と発生している時期にもかかわらず、大学側の姿勢は極めて協力的で、学期末試験の最終日の昼休みに開催することができた。

コロナ感染防止をさらに徹底する対策として、ボランティアは自家用車を保有する少人数に限定し、合計7台の自家用車のトランクや後部座席に各種の食材を積み込んで会場に乗り入れた。駐車場に食材を満載した車を止め、後ろドアを開放しておき、来場した学生に食材を自由に選んで持ち帰ってもらう方式で配給した。この方法は食材を現地で並べる手間が省け、後始末もほとんど必要としないため、車を乗り入れる場所さえ確保できれば、短時間で食糧を大人数に配給することができる。キッチンカーのような合理的な配給方式と言える。

当日、未来大学の学生の多くは対面式またはオンライン式の試験を大学校内で受験していたものとみられ、大学事務局との意見交換では当初の来場者数予想を50名程度と見積もっていたが、実際には2倍を上回る120名もの学生が来場し、大学事務局も驚くほどであった。開始時間前から50名を超える学生が整然と並んで持っており、開始後30分ほどで食材が底をついた。これで学生の食糧ニーズの高さがあらためて証明された。後日の実行委員会では、13時過ぎに来場した学生にはジャガイモしか提供できず、次回以降は予想を上回る来場者にも対応できる十分な量の食材準備が課題として残された。

おわりに

これまで3回の学生食糧支援イベントを実施した経験から、学生の食糧ニーズの高さを実感したが、その背景を深く読み取る必要があるように思われる。北海道教育大学は教員養成課程を中心に道内5つのキャンパスを抱えるが、函館は新幹線で本州と直結している地の利から、函館校の学生の半数は大震災の影響がいまだに残る東北出身者が占めている。過去の函館校の学生アンケートでは過半数の学生が保護者からの仕送りなしと回答している。総じて函館には経済的に恵まれない学生が多く就学しており、とくに寮生の場合は大半がアルバイト収入か奨学金で生活費のすべてを賄ってきた学生がほとんどである。しかも観光業、飲食業を基幹産業とする函館経済がコロナ緊急事態宣言によって壊滅的な状況となり、多くの学生が従事する飲食や販売のアルバイトではシフトが従来の2割以下にまで落ち込んでいるという。そのような学生が切り詰められる経費は食費くらいであり、その結果、三食ともにカップ麺で済ませるような学生が現れるものとみられる。

また、保護者から多少の仕送りを受けていたり、奨学金を受けている学生にとっても、家業が自営業であったり、年下の兄弟姉妹をもつ学生には、コロナ禍での家族の暮らし向きを慮って仕送りを減らしてもらおうとする者もいるだろう。いまだきの学生は想像以上に家族思い、親孝行であるから、そのような家族の暮らしを助け、奨学金の不足を補うために食費だけでも節約しようとする心理がはたらいっているように思われる。もっとも深刻なものは、学費負担と将来の奨学金返済を心配して、今後の修学を諦めて休学や退学を真剣に検討している学生が現れていることだ。学生の窮状はコロナ禍に翻弄される保護者の窮状の反映であり、いま日本社会で極まりつつある格差と貧困の拡大の影響が立場の弱い学生に収束した結果と言える。

このような学生の窮状を見るに見かねて市民が立ち上がった運動が、いま各地で展開されている学生への食糧支援の取り組みである。筆者自身の学生時代を振り返ると、経済的には苦しいながらも、決して孤独な学生生活を送ってきたわけではない。多くの優れた教師や先輩、友人と出会い、休日に安月給の先生の自宅に押しかけて奥様の手料理をご馳走になりながら心温まる会話を交わしたことは忘れられない貴重な思い出であり、大人から若者への励ましであった。筆者としては、そのときの恩返しをいま単純に反復しているにすぎないが、コロナ禍での学生食糧支援活動は「未来のため」の

行動を次世代に継承する行為と言えるかもしれない。「このご恩は働くようになったら別の形で社会にお返ししたい」という支援学生の決意にふれて、筆者は未来の社会変革への大きな希望を感じている。

さて、いま巷から聞こえてくる、「オンラインばかりの大学の授業料は半額に割引せよ、有利子の奨学金制度はただちに廃止して給付型奨学金を充実させよ」、という学生やその保護者からの声は的をえた率直な要求であると思う。これほど多くの食糧支援を必要とする苦学生が我々の目の前に存在するという事実は、公教育支出OECD最低レベルにある我が国では学生への公的支援が決定的に欠乏していることを鋭く告発している。

若者を粗末に扱う国家に未来はない。目の前の学生を支援しつつ、学生ボランティアなどの志ある学生には「支援される側」から「支援する側」に立っていただき、学生自らの手で「未来のため」の政府を取り返す運動を励ましていくことも極めて重要な筆者らの仕事である。その点を意識しながら、今後の活動を進めていきたい。

活動の記録

事業名：函館学生食糧支援プロジェクト 方式：実行委員会方式

実行委員長：鈴木 互（建交労函館支部事務局員）

実行委員と人数：函館市民、ボランティア学生も含めて30名以上

開催イベント名：「食材もってけ市」

第1回：2020年11月22日（日）11:00-13:00 教育大学函館校 園庭東屋 来場者100名

第2回：2020年12月13日（日）14:00-16:00 湯川寺 来場者70名

第3回：2021年 1月28日（木）12:00-13:30 はこだて未来大学 北駐車場 来場者120名

その他北大水産、教育大の男子、女子の学生寮にジャガイモと保存用パンを2度配給

協力団体：中小企業家同友会函館支部、フードバンク道南協議会

提供食材：函館・道南約20社の中小企業、その他約30件の個人や団体からの寄贈品

野菜類：ジャガイモ（1トン超）、キャベツ、レタス、大根、ニンジン、カボチャ、納豆

果物類：ミカン、リンゴ

主食類：保存用パン（2112個）、アルファーマ（5kg130箱）、精米（約200kg）

乾麺類：パスタ、インスタントラーメン（500袋）、うどん、蕎麦

缶詰類：サバ、マンゴー（336個）、ブリ（150個）

レトルト類：カレー（400袋）、パスタソース（200袋）、茹でジャガイモ（360袋）、カボチャ（50袋）

冷凍品：冷凍コロッケ（100kg）

菓子類：クッキー・ホワイトチョコ（150セット）、煎餅、ポテトチップス

第1回「食材もってけ市」 北海道教育大学函館校前庭



第2回「食材もってけ市」 浄土宗 湯川寺



第3回「食材もってけ市」 公立はこだて未来大学 北駐車場



フードバンクの取り組みについて

～コロナ禍の若者・学生は何を必要としているのか～

講師 館野 亜実（北海道大学教育学部研究生）

コロナ禍による学生の困難が様々なメディアで報じられ、学生の実態が明らかになりつつあり、政府も動き始めた。しかし、支援の現場では『お金がない』『食べ物がいない』『友達がいらない』という学生の声が、支援の始まった昨年8月から今年の3月に至るまで変化なく届いている。このことから、政府の支援策や大学を始めとした諸団体の支援策が学生に届いていないと考えている。一時的な支援として、速やかにより多くの学生を対象とした食料の配布や金銭的な支援が求められており、抜本的な改善としては学費の半減や給付型奨学金の拡充が求められている。

2. 館野氏の報告要旨の追加

事務局のほうで、印象に残った点は、

①この数ヶ月間で、館野さんらのフードバンクの取り組みは、多くのかたの物資・資金の協力を得て、25回、954人への配給をし、347人からのアンケート調査を実施し、集約・整理していること。

②学生・若者の切実な声を集め、取り組みに生かしていること（議員、新聞などに発信していること）。

③参加者からの声（聞き取り調査347名もの声）を大切にした取り組みと、学生・若者が主体的に取り組めるように、組織化への努力をしていること。

（参加組織の運動にとっても重要な活動になっている。主体的な活動になっていること。）

④公的な支援要求へとつなげる努力をしていること、などである。

まとめについて

北海道高等教育研究所 代表理事 姉崎 洋一

昨日（3月9日）は、3時半から、2時間。フードバンクの2つの報告を聞いた。北海道高等教育研究所の主催。

田中邦明さん（北教大函館校、名誉教授）と、舘野亜実さん（酪農大卒、北大教育研究生）の報告だった。

1. 田中さんの報告は、示唆に富み、生き生きしていた。①コロナ禍の中での学生の経済苦を予測して、食糧支援が鍵と事前に捉えた。②函館圏の大学の横の連携を取りながら、中小企業家同友会の支援、トラピスト教会やその他各種団体の支援を得て、食材の大量確保、③学生ボランティア、成人ボランティアの組織化、④各大学の学生寮や留学生会などへの呼びかけ、⑤学生のアルバイト先の紹介、⑥授業料や高学費問題への啓発等であった。将来、支援される側から支援する側にも立ってほしいという気持ちも込めて。

2. 舘野さんも、道内での25回の経験を踏まえながら、①フードバンク活動は学生の困りごとに対応し、食材や日用品に事欠く学生への支援であり、②孤立しがちな生活や学業の不安に対する相談、③公助をもっと広げていくための運動であることなど、具体的にお話いただいた。

3. 話の中では、

・函館の田中さんと舘野さんの教訓を広げる工夫が必要（中小企業家同友会やクリスチャン、仏教会に依頼することの重要性）

・支援に多くの方が共感していただいたその上で、単なる共助に止めず政府の公助を引き出すこと。

・学生の自己責任意識から脱却して自らも運動に加わってもらい、広げるためには何が必要か。

・子ども食堂の経験から学ぶことが大事である。

・学費半額運動が北海道では弱いのは何が原因か？など多岐にわたる論点が提示された。

これら参加者から活発な意見も頂いたことやまだ運動が続くので第二弾も計画しようとの声もあった。

意見交換で注目したこと

事務局 市川 治

(1) 物資の集中と配給についての意義

①物資の集中と配給の方法等の違いについて

北海道教育大学函館校の田中先生らの取り組みは、幅広く関係団体（中小企業家同友会函館支部等）からの支援を得ているという点で支援枠が広いようである。

館野さんらの取り組みは、民主団体・個人を対象に支援を得て、取り組みを実践しているようであった。

②連合と生協等で1000人の北大生等（留学生）にフードバンクで物資を支援したというが、この方法・取り組みについて。

一気に沢山の学生（留学生）に配った意義は、そのことは、多くのフードバンクの取り組みに触発を受けたものであり、必要性があるからであると思う。しかし、ただ配るだけでは（2500円？のものをセットにして配ったが）、公助への要求に繋がらないようにも思われる。ただで、沢山に配ればよいというものではないようにも思う。

ささやかな取り組み、地道な取り組み、そのなかで、学生とともに考えて（学習し）、学生が自ら参加していく、考えていく、行動していくことへの手助けとする必要がある。

(2) 主体の取り組みについて

田中先生のほうは、教員や労組のかたが個人で参加し、学生等を巻き込んで取り組みを進めている。役割分担を明確にしている。

館野さんらの取り組みは、道内、幅広く、民主的な青年組織と地域の民主団体の方々を中心にやっている。物資の集中と配布は、主に、地域のかたが中心で、学生等は、話を聞くほう（聞き取り調査）を中心的に行っているようである。

(3) 学生の本当の要求について—学費半額要求（値下げ要求）について—共通

①道内の学生は、学費の半額要求をしていない理由は？。これまで、北大（北海）が行っていたが、宣伝がされていなかった？。

全国では、200以上の大学学生での声となっている。しかし、道内の声が聞こえてこない。この理由はなにか。いろいろと理由（親からの学費の支払いや、道内・自宅生が多い。施設への支援要求はある。コロナに対応しての返還要求はある等？）が考えられるが、田中先生からは、教職員が声をあげる必要がある。それを学生に伝えていく必要がある。

私の意見では、私大での私大助成運動は、その一つと考える。授業料無償化に向けた取り組みが必要と思う。国公立大も学費半額や授業料無償化努力をしてもらいたいものである。昔の学費値上げ反対運動のように、誰でもが平等・均等に教育を受ける権利（その条件整備のため）、国際的な人権規約の批准からしても学費の漸進的無償化を実現していく必要がある。

②お二人の報告でも、共助だけでなく、本質的に公助として学費の無償化に向けた学費半額補助の要求をしていく必要があることが強調された。このことは、この取り組みの意義を明確にしていると思うのである。

阿部さまからのご意見・感想

昨日はお疲れさまでした。大変勉強になりました。

函館の話は圧巻でしたね。函館時代、田中先生の活躍は大変頼もしいもので、職場(道南勤医協)の学習会等でもお世話になっておりました。また、同友会には幹部大学にも参加させていただき、貴重な経験をさせていただきました。当時の道南勤医協の専務は事務職員にもっと経営者としての責任とセンス(?)を持たせるためとして、こうした企画(幹部大学等)に、課長・事務長クラスを参加させていました。数年でこの取り組みは終わったようですが、立派な額入りの卒後証書が残りましたね。

さて、江別市のフードバンクですが、青年の方の体制がととのわないのか、笛吹けど踊らずの状況ですが、OB会としてはいつでもできるように準備はしておこうと思っています。幸いなことに、全国にいるOBはカンパを寄せてくれています。今回の学習会で知恵を頂きましたので、4月には実施できるようにしていきたいと考えています。今後もよろしくお願いいたします。

(阿部 久)

田中先生からの追加のご意見

昨日は函館の取り組みを紹介させていただき機会をいただき、まことにありがとうございます。こちらこそ、わざわざメールを頂戴し、まことに恐縮です。

さて、コロナ感染がしだいに収束し、一定の段階において学生への食糧支援からは手を引くことになるかもしれませんが、その後は、また別の形での学生支援がもとめられることになると思います。と言いますのも、我が国の若者政策の根本的変更がない限り、本質的な学生の社会的立場と経済的基盤の改善が図られない状況に変わりはないと考えられるからです。とくに各大学が取り組んでいる授業料免除枠と給付型奨学金の抜本的拡大がない限り、学費負担の大きさによって進学を断念する若者がなくなるはずです。とくに保護者の経済格差の拡大がこのコロナ禍でいっそう深刻化していくことが予想されますので、その影響によって我が国の高等教育進学率がむしろ低下することすら予想されます。そのことは18歳人口の減少が続くなかで、相対的に授業料が高額である私学の経営を直撃するものです。小生は在職中に函館地域の国公私立、高専の高等教育機関を結ぶ大学コンソーシアム運動に長年取り組んできました。さらに全国の大学連携組織による学生の社会的、経済的支援策のアイデアがないかどうか、いま模索中です。過去20年間におよぶ全国の大学コンソーシアム運動の成果は多面的で実り多いものがありましたので、新たな活動分野として経済的な学生の相互支援、互助的メカニズムの構築も考えられると思っています。

もし、大学連携組織の成果についてご関心がありましたならば、下記の拙稿をご参照ください。大学非常勤講師の立場ではありますが、長年築いてきた人脈が全国にもありますので、大いに役立てようと思っています。

「我が国の大学教育改革に果たしてきた大学コンソーシアムの役割：全国私立短期大学の改廃と大学コンソーシアム加盟との関連性からの考察」北海道教育大学紀要、教育科学編 70(2), 171-182, 2020-02

(函館 田中 邦明)

原島さまからのご意見

小松様、オンラインセミナーへの参加が出来ました、どうもありがとうございます。
未来を背負う若い学生さん達の窮状、コロナに因る何かにかの悪影響が有るであろう事は分かっていたのですが、食事も満足に摂れないとは周りの大人の不注意？では無いでしょうか。数か所の或る大学ではその点配慮をしているとの新聞記事を読みましたが、学生達の現実をテレビ等では取り上げていないと感じています。

今行われている「子供食堂」の形で、ボリューム満点・栄養満点の朝食を、休日以外に学食で学生さん達にしっかり摂っていただくというのは如何でしょうか。

道庁へこの現実を訴えようと思います。

「北海道高等教育研究所」様からもいろいろな機関へ働きかけていただきたいです。
これから日本を世界を背負う大事な若人を、早急に助けていただきたいと切望します。
ありがとうございました、よろしく願い致します。

(原島 和子)

米津理事からの感想

市川先生、皆様

お世話になっております。

南山大学（元稚内北星学園大学）の米津です。昨日はありがとうございました。

昨日は発言しませんでしたので、感想を送らせていただきます。

まずは、学生の状況が昨年8月から変わっていないということにショックを受けました。そもそもアルバイトに行けなくなると満足に食事ができなくなるということは、コロナ禍でなくても、試験期間中や就職活動等でアルバイトを減らさざるを得ない時期には、それに近い状況が起こり得るということではないかと思いました。

改めて高等教育における、学ぶ基盤であるはずの「生活保障」の貧困さを感じました。また、組織の仕方や連携、拡大についてのお話が出ていました。

私も大学院を終えて7年ほど経ちますので学生の様子はまた変わっているかもしれませんが、当時の雰囲気として、「院生自治会活動そのもの」に価値を見出すような雰囲気はありませんでした。それよりも、そうした団体が勉強会を実施したりすることで、他の大学院生と交流したり意見を交換することが好まれていた印象です。

勉強を通して問題意識を育てるところから始めないといけないのではと思います。

フードバンクの取り組みにこうした考え方が生かし得るのかは分かりませんが、フードバンクの会場において、実施されたアンケートの結果を貼り出したり、関連する動画や掲載可能な写真などがあれば展示して、「食糧配給所」としてではなく「活動そのもの」についてやその結果、他の学生の状況などを知ってもらえるといいのかもしれないと思いました。そうしたことで問題意識を育てることがファーストステップではないかと思います。連携することや活動を拡大していくことはとても大事ですが、まずは組織内で工夫して活動を充実化させていく方がやりやすいのではと思いながら聞いておりました。

本来はこういう活動をせざるを得ない状況が問題なのだと思いますが、こうした状況に対してすぐに対応できる基盤があることも素晴らしいと思いました。

以上です。ありがとうございました。

(理事 米津 直希)

光本理事からの意見・感想

お知らせありがとうございます。

書かれていることは善意だとわかるのですが、大学生は「子ども」とは違います。

田中先生が言われていたように、自ら求め、権利の主体となっていかなければなりません。大学はそうした思考のできる学生を育てるために努力すべき、と、ここまで書いたところで、米津さんのメールに接しました。

北大でも、院生自治会の選定する外部の大学等の講師の講義が予算化されていたのですが、要求がなくなり、廃止するかという議論になっています。要求を明確にしたり、正当性を説得的に主張することは学習の根本であるのに、そうした経験を積む機会がないと、大学の学問自体が痩せ細っていくような気がしますね。

(理事 光本 滋)

第3回北海道高等教育研究所のオンラインセミナーのご案内

テーマ：新型コロナと向き合う大学づくり

—大学生協の取組みについて—

1. 日時: 4月12日 17時15分～19時15分

2. 報告について

報告者 東大生協 石幡敬子氏 (専務補佐)

酪農学園生協 吉田 磨氏 (理事長・酪農学園大教授)

3. 意見交換

○参加希望者は、研究所のメールアドレス等にご連絡ください。

(後ほど、招待メール等を送信します。)